幼児における移行対象と愛着の発達

岐阜市北保健センター・発達相談員 駒田閑子
岐阜大学教育学部学校教育講座 別府哲
岐阜大学教育学部学校教育講座 宮本正一

問　題

Winnicott（1953）は乳幼児が特定の対象（毛布やタオルケット等の布類あるいは人形，ぬいぐるみなどの玩具類）に特別の愛着を寄せる現象を，移行対象（transitional object）もしくは移行現象（transitional phenomena）という術語で概念化した。移行対象は分離場面などの子にとってストレスフルな状況において母親または乳房を象徴的に代理し，子を落着かせ，慰めるものとして機能する。また，移行対象が子どもの情緒発達過程においてポジティブな意味を有することを明らかにし，対象分化の発達段階を理解する指標として位置づけた。

Winnicottは移行対象の発現の前提として，ほぼよい（good enough）母子関係が基盤となると主張している。ほぼよい母親とは完全に良い母親とか立派な母親という意味ではない。むしろ乳幼児にごく自然にそなわった生存的潜在力の発達を促進する程度に，ほぼよい平均的で平凡な母親のことである。つまり，乳児の未熟な依存は受け入れながら，自立や個人性を獲得しようとする乳児の冒険的な試みを支持し，人間関係の中で自己自身の人生を発見させてくれるような環境を提供するのがほぼよい母親なのである。このような外的対象であるほぼよい母親を通して，生き生きとして現実性を持ち，ほぼよいといえる母親の内的対象を獲得することが，移行対象を使用できるようになる基盤となるのである。

これに対して遠藤（1989）は，ほぼよい母子関係が生き生きとした母親の内的対象を獲得させ，それが移行対象の使用にも密接に関わっていることは認めながらも，これらと直接つながっているのは移行対象の発現そのものとではなく，“対象を使用する能力（a capacity to use objects）”の獲得とであり，しかもほぼよい母子関係とその内的対象は絶対的依存期という乳幼児期のより早期において重要となると述べている。

対象を使用することについてWinnicott（1979）は，対象と関係すること（object relating）と区別して述べている。対象と関係することとは，主体が主観的にとらえた対象と関係することを指し，対象を使用することとは，主体が客観的にとらえた外的対象として対象を使用することを指している。そして，この課題は，ある程度自他の境界が形成された段階から次のより発達した段階への対象関係の発達においてみられる変容である。

絶対的依存期の乳児は対象を主観的な経験の中で捉え，対象を乳児の全能的な支配下に置いていると言える（対象と関係する）。しかし，相対的依存期になると対象が幼児の全能的支配のままにならないことが経験される。つまり，対象を主体の側から捉えるのではなく，対象それ自体を自分とは別の存在物として認識することになる。ここで自分の思い通りにならない欲求不満を感じる幼児は，この対象に対して攻撃性を向ける。しかし幼児の主観的破壊にも関わらず客観的対象は生き残り，この経験を通して幼児の全能的支配を越えた存在として外的対象が確立される。そうして生き残った対象について対象の使用が可能になるのである（Guntrip,1981）。そして，この対象を使用する能力の獲得の際に，母親は幼児が何回攻撃してもその都度生き残ることを通して幼児に反応してやる，最初の

人間になることが重要であるとWinnicottは述べている。

遠藤（1989）はこの“対象を使用する能力”を獲得することの重要性に注目したが，その獲得が即，現実の移行対象の使用を意味するのではなく，その能力と実際の移行対象発現との間に“現実に移行対象が必要とされる状況”という環境側の要因を仮定した。それまでは母子関係の質が問題になる時期を広く幼児期早期としてきたが，遠藤は絶対的依存期と相対的依存期に別個の重要性を付し，絶対的依存期における母子関係のあり方を対象を使用する能力の獲得を準備するものとして，相対的依存期以降の母子関係のあり方を，実際の移行対象の有無を分けるものとしてみたのである。移行対象が発現しない場合には，①絶対的依存期にある段階での，ほぼよいとはいえない（希薄な）母子関係に由来した，そもそも対象を使用する能力を発達させることができなかったが故の移行対象無と，②早期，ほぼよい母子関係に支えられて対象を使用する能力を発達させているが，相対的依存期以降，母子関係の質の変化が相対的に小さく，依然“濃密”であるが故に（現実に移行対象が必要とされる状況にないが故に）結果的に移行対象への愛着が見られなかった移行対象無とがあるとした（遠藤，1989）。

対象を使用する能力が獲得されない状況とは，そもそも母親の内的表象が子の中に育たない状況を指すとし，母親の豊かな内的対象が準備されて初めて，子は状況に応じて適応の術として移行対象を使用し得ると結論づけた。その上で，移行対象はいかなる状況でなぜ必要とされるのかという発生因の解明を今後の課題とし，移行対象と授乳様式，就眠様式，母親の養育意識・母性意識，子どもの気質等の諸要因との関わりを指摘した。

移行対象の発現の前提として，絶対的依存期におけるほぼよい母子関係による対象を使用する能力の獲得，その後の相対的依存期における母子関係の質の変容による，適応の術としての実際の移行対象の使用というプロセスが考えられた。絶対的依存期と相対的依存期のそれぞれの時期における母子関係が別個の意味を有しているものの，どちらの時期においてもほぼよい母親が子の対象使用の発達に重要な役割を果たしていることには共通的であった。このようなほぼよい母子関係を通して絶対的依存期にはほぼよい母親の内的対象，つまり母親のよいイメージが生き生きとして獲得されるのであるが，相対的依存期，つまり移行対象を使用するようになってからの母親イメージはどのように変容するのであろうか。絶対的依存期で獲得された母親の内的対象とは，あくまでも静的な母親イメージである。具体的な環境の変化や具体的な移行対象の使用という経験を通して獲得される，具体的な母親イメージ（動的なイメージ）については現在までの移行対象理論の中では触れられていない。相対的依存期以降の母子関係の構築に，それ以前に獲得された母親の内的対象や移行対象の使用という具体的な経験が，何らかの影響を与えているのではないだろうか。

母親の内的対象が母親の静的イメージであるとすると，母親の動的イメージとしては母親という愛着対象に関する内的作業モデルという概念で説明され得る。Bowlby（1982）は周囲の世界と世界内の行為者としての自己の主要な特性をあらわすいくつかの動的モデル内部に形成されていく，個人の概念（内的作業モデル）が内的対象の概念に置き換えられるとしている。つまり，内的対象として獲得された静的モデルは具体的な経験を通して動的モデルに再構成することができ，この再構成された動的モデルが内的作業モデル（internal working model）であると言う。母親の内的対象は愛着対象に関する内的作業モデルという動的モデルに再構成されるというわけである。

愛着の内的作業モデルとは，愛着対象に子どもがとった行動あるいはとろうと意図した行動に対して，愛着対象がどう反応したのかということの歴史の反映であり，子どもは愛着対象との具体的な経験を通して，愛着対象への近接可能性，愛着対象の情緒的応答性等に関する主観的な確信，表象を有するに至る。また，愛着対象についての内的作業モデルの形成は，同時に自己に関する作業モデルの構築に相補的に結びついており，自分にとって愛着対象は誰で，その人にはどの程度接近しやすく，どう応答してくれるのかという経験から愛着対象についての主観的な考えを内在化し，それに応じて

自分がいかに愛着対象から受容されているかという，自己についての主観的な考えを内在化する。このように構築された愛着の内的作業モデルが一貫した機能を果たす結果，外的な愛着行動も一貫性と安定性を備え，さらにこのモデルは特定の愛着対象を離れても有効に作用するようになるのである。

移行対象の使用がこの愛着の内的作業モデルに影響を与えるとすると，具体的につぎのような関係が考えられる。

移行対象は，分離場面など子にとってストレスフルな状況において母親自身や乳房を象徴的に代理するという機能を持っていることは，先に述べたとおりである。移行対象を使用する場合，子どもは母親と分離することを意識化する機会そのものが相対的に多くなるのではないかと考えられる。ここで強調しておきたいのは，移行対象の使用がそのまま実際の母親との分離の機会の多少を規定しているというのではなく，あくまでも意識化に関してその多少を規定すると考えるのである。同じような状況に置かれても，その母親との分離をストレスなものと感じれば母親との分離を多く意識することになるが，それをストレスなものと意識しなければ母親との分離を多く経験したことにはならない。つまり，移行対象を使用する子は，移行対象を使用しなければならないほど母親との分離をストレスに感じていると言うことができるのである。移行対象の使用が個別的な経験の差を生むのであれば，それは分離場面をいかに多く意識する機会があるかということではないかと考えられる。

よって移行対象を使用する子，つまり母親との分離を意識化する機会が多い子は，母親との分離場面に関する内的作業モデルを早期に構築するのではないだろうか。しかもそれは“今は離れていてもきっと再会できる”という肯定的な形での内的作業モデルになると考える。なぜなら，母親との分離場面を多く意識するものの，そのあとに必ず経験するであろう，ほぼよい母親との再会を意識する機会も多いからである。母親と離れなければならないストレスを強く感じれば，母親と出会った安心感も強く感じるであろうと思われる。よって，移行対象を経験することにより，母親との分離－再開場面を多く意識し，分離－再会に関する愛着の内的作業モデルを早期に，しかも安定した形で獲得するのではないかと予測される。

本研究においては，この移行対象の使用が母親の動的モデル，ここでは分離－再会場面に関する愛着の内的作業モデルの獲得に与える影響を検討することにより，移行対象の使用が子の個別的な経験として持つ意味を明らかにしようとすることを目的とする。

研　究　I

対　象

G市立A幼稚園に通う年少児31名（男子16名，女子15名），年中児17名（男子11名，女子6名）の計48名を対象とした（月齢39ヶ月～55ヶ月）。

手続き

1）移行対象

対象児の保護者に対して移行対象に関する質問紙調査を行った。質問紙は遠藤（1990）による研究を参考にして作成した。内容は次のとおりである。

①移行対象の有無：「毛布やタオルなどの布類，またはぬいぐるみやおもちゃなど，何か特定のものを放すことなく持っていたり，あるいは入眠などの際，特別に身近に置いていたりするというようなことは幼児の発達の中でよく見られることですが，あなたのお子さんにはそのような事がありますか。または過去にありましたか。」という問いに，はい・いいえで回答を求めた。②移行対象の種類：対象の具体的な内容の記述を求めた。③発現時期：移行対象を被験児が必要としていた期間について，月齢の数直線上に印をつけて回答を求めた。④発現理由：被験児が移行対象を持つようになったきっかけについて，保護者の思い当たることの自由記述を求めた。

2）愛着の内的作業モデル

対象児の愛着の内的作業モデルを測定するために，幼児・児童絵画統覚検査日本版図版（以下CAT）を実施した。CATは久保田（1995）が幼児の愛着の内的作業モデルの測定の取り組みとして取り上げ，CAT図版についての自由記述から表象レベルの愛着を分類することの妥当性を示している。

①検査図版の選択とその意義

CAT（日本版）は計16枚で構成されている。本研究においては家庭での母子関係場面を描いた図版3「赤ちゃん」及び，幼稚園での日常生活場面を描いた図版7「幼稚園」を選択した。各図版の内容は以下のとおりである。

図版3：親リスが赤ちゃんリスを抱っこしており，その右横に子リスが立って見ている。親リスは右横の子リスの方向に手を伸ばしているが，この手振りは“こっちにおいで”と招いているのか，あるいは接近することを拒否・禁止しているのか，その意味については多義的である。ここで登場する3匹のリスのうち，どれを主人公チロとするのか。その他のリスを誰として，どのような関係を思い描くのか。ここでは上記のストーリーにどのような母子関係，きょうだい関係が組み込まれているかに着目し，愛着の内的作業モデルの反映として取り上げた。

図版7：一匹のリスは園庭で他の動物達といっしょにお遊戯をしている。門の前のリスは幼稚園に行くのを嫌がっており，門の右手のリスは幼稚園を無視するかのように振る舞っている。本来この図版はどのリスをチロとするかに着目することによって幼稚園への適応・不適応および幼稚園への関心等を見るものであるが，ここでは門の前のリスとその親リスとの関係を中心としてストーリーに組み込むことによって，母子分離場面での愛着の内的作業モデルの反映として取り上げた。

②検査方法

CAT検査は対象児が月齢39ヶ月から55ヶ月の範囲の時期で，心理学講座の学生2名によって行われた。

検査は幼稚園における子どもの所属する組の教室またはその周辺にて行った。1名の対象児に対して実験者が『絵を見て遊ぼう』と検査に誘った。実験者は本検査に入る以前より保育士補佐として幼稚園で子ども達とともに生活し，子ども達とのラポートは作られた状態で検査に臨んだ。

幼児・児童絵画統覚検査解説（戸川，1955）の施行法に基いて一枚ずつ図版を呈示し，『この絵を見てお話作ってね』等と図版を見て子どもが自由に話を作ることができるように援助した。子どもによっては自発的に話し出すことができない場合（直ちに『わからない』としてその場を逃れてしまう場合）や，話が図版から免れてしまう場合（『○○ちゃん泣いてる』等図版とは関わりないほうへ注意が向いてしまうなどの場合），叙述の内容からは目的としている情報が得られない場合（図版の中のおもちゃや食べ物の叙述のみしかみられないなどの場合）がある。このような時は実験者が『これは誰かな？』『何をしているのかな？』などの補足質問をしてストーリーの完成を援助した。そして，被験児と実験者のやり取りはカセットレコーダーと記述によってすべて記録した。また，図版は3，7の順に呈示した。

検査は子供たちの自由遊びの時間が使われたため，周囲には他の園児たちが様々な遊びをしており，途中で検査が実施できない状況になることも多くあった。その場合は速やかに検査を中止して，後日改めて検査を行った。

結果と考察

1. 移行対象

移行対象先駆物（Hong，1978）に相当する哺乳びん，おしゃぶり，自分の指，母親自身を除いた，

本研究における移行対象の発現率は，48名中15名，31.3%であった。この数値はこれまでの日本の移行対象発現率を調査した藤井（1985）の31.1%，遠藤（1990）の38.0%と比較的近い数値であった。また，実際に使用された移行対象の種類について，Hong（1978）の分類基準をもとに一次性移行対象（タオルや毛布等の布類）と二次性移行対象（ぬいぐるみ等の玩具類）とに分類することができた。このことより，今回移行対象として扱った対象がこれまでの研究で取り扱われてきた移行対象と同質のものであったことが示された。

また，一次性移行対象と二次性移行対象の発現時期がそれぞれ15.8ヶ月，26.9ヶ月であったことは，移行対象発現時期を一次性移行対象は1歳前後，二次性移行対象は2〜3歳ころとしたHong（1978）の見解にある程度対応していた。しかし，一次性移行対象を持つ子（6名）の中にも2歳半という比較的遅い時期に発現した場合（2名）や二次性移行対象を持つ子（9名）の中にも1歳以前という比較的早い時期に発現した場合（2名）もあった。このことより，Hongが示した移行対象の分類のうち，移行対象の種類によって一次性移行対象と二次性移行対象に分類できるということは支持されたが，一次性移行対象が二次性移行対象と比べより早期に現れるということは示されなかった。

一方，遠藤（1991）が示した移行対象の有無と性差，また移行対象の有無ときょうだい順位との間での有意な関係も，本研究では確認できなかった。これらの結果は，今回の調査における被験児の年齢層・人数がともに限られたものであったことが影響しているのではないかと考えられる。今後の検討が求められる。

2. 移行対象の使用と愛着の内的作業モデル

愛着の内的作業モデルをCATによって測定した結果を図版ごとにまとめると，以下のようになった。

〈図版3〉

主人公チロの母子関係を基準にしてタイプを分類し，母子関係を判定した。まず対象児の叙述から，主人公（チロ）にどのリスを選択したか，他の登場人物を誰と捉えたか，他の登場人物とチロとの関係をどう捉えているかに着目して母子関係を次の7タイプに分類した。

1. Holding（抱かれているリスを主人公，抱いているリスを母親としている。例：『お母さんが抱っこして，チロちゃんは指チュッチュしてる』）

2. 肯定的関係（抱いているリスを母親，見ているリスを主人公とし，その関係を肯定的に捉えている。例：『お母さんチロちゃんにおいでって言ってる。』）

3. 否定的関係（抱いているリスを母親，見ているリスを主人公とし，母親の関わりが拒否的な場合。例：『お母さんがあっち言ってっていってる。』）

4. かかわり欠如（抱いているリスを母親，見ているリスを主人公とし，その関係は叙述されない。例：『何もしゃべってない』）

5. 母親不在（登場人物に母親が叙述されない。例：『チロちゃんとチロちゃんの赤ちゃん』）

6. 願望（自分に弟や妹がいるにもかかわらず，抱かれているリスを主人公とした場合）

7.わからない（主人公の選択などの叙述ができない）

上記の分類による結果は，表1のとおりである。その分類において1，2を「母子関係安定群」，3，4，5，6，7を「その他群」の2群に判定したところ，母子関係安定群が25名，その他群が23名であった。

表1　ＣＡＴ図版３における母子関係の判定

タイプ	人数	判定
1．Holding	8	母子関係安定群
2．肯定的関係	17	母子関係安定群
3．否定的関係	2	その他群
4．かかわり欠如	3	その他群
5．母親不在	7	その他群
6．願望	4	その他群
7．わからない	7	その他群

〈図版7〉

門の前の2匹のリスの母子関係を基準にしてタイプを分類し，母子関係を判定した。対象児の叙述から図版の絵をどのような場面として捉えたか，母親と子リスの関係をどう捉えたかに着目して，母子関係を以下の6タイプに分類した。

1. 分離・再会（分離または再会の場面として捉え，母子の対話が肯定的に叙述されている。例：『みんなと遊んでおいでって言って，うんって応えてる』）

2. 会話（分離または再会場面であると判断されないが，母子の皇帝的な会話が叙述されている。例：『おやつはドーナツねってお話してる』）

3. 要求拒否（母親への要求が拒否されている。例：『抱っこしてって言ったらダメって言われた』）

4. 分離不安（母親とはなれるのを嫌がっている 例：『お母さん帰らないで』）

5. 母親不在（母親でない人物とする 例：『これお兄ちゃん』）

6. わからない（どんな場面であるかの叙述ができない）

上記の分類による結果は，表２の通りである。その分類において1，2を「母子関係安定群」，3，4，5，6を「その他群」の2群に判定したところ、，母子関係安定群が13名，その他群が35名であった。

表２　ＣＡＴ図版７における母子関係の判定

タイプ	人数	判定
1．分離・再会	10	母子関係安定群
2．会話	3	母子関係安定群
3．要求拒否	11	その他群
4．分離不安	5	その他群
5．母親不在	1	その他群
6．わからない	18	その他群

移行対象の有無とCATの図版3・7のそれぞれにおいて行った判定との関連について検討するためにχ^2検定を行った。この時，CAT実施時にはまだ移行対象が発現していなかったが，その後使用があったとした1名については分析の対象から除外した。その結果，図版７での母子関係と移行対象の有無との間に有意な関係が見られた（$\chi^2=10.48$，df＝1，$p<.01$　表4）。よって移行対象有群のほうが移行対象無群より，図版7における母子関係安定群が有意に多いことといえた。

表 3　CAT図版3における母子関係と移行対象の有無

	移行対象　有	移行対象　無	Total
母子関係安定群	9	16	25
その他群	5	17	22
Total	14	33	47

$\chi^2=0.65$,　df＝1,　n.s.

表 4　CAT図版7における母子関係と移行対象の有無

	移行対象　有	移行対象　無	Total
母子関係安定群	8	4	12
その他群	6	29	35
Total	14	33	47

$\chi^2=10.48$,　df＝1,　$p<.01$

CATにおける母子関係を安定したものとして捉えたということは，子どもが愛着対象に対する内的作業モデルを安定したものとして形成していると言い換えることができる。よって，移行対象の経験がある子のほうが安定した愛着の内的作業モデルを持つことになる。しかし，この結論はあくまで図版7においてのみ適用できるものであり，図版3では移行対象の有無と表象上の母子関係との間に有意な関係は見られなかった。つまり，移行対象の経験は分離再会場面における愛着の内的作業モデルの獲得にのみつながっているということ，しかも確認された分離再開場面に関する内的作業モデルは，安定した母子関係を叙述していると判断され，本研究の仮説が支持されたと考えられた。

一方，移行対象を使用しなかった子どもについて，分離再会場面の愛着の内的作業モデルの安定群が有意に少ない結果となったが，CATの図版7におけるその他群（35名）の中でも下位分類で6.わからないとされた子が18名であった。これは図版3における下位分類7.わからないが7名であったことからも，比較的多くの被験児が図版7では母子関係を表象すること自体が困難であったことが言える。つまり，移行対象を使用しなかった場合，分離再会場面に関する愛着の内的作業モデルが安定しないものとして獲得されるのではなく，本調査時点では依然獲得されていなかったと考えることができる。Bowlby（1982）は愛着の内的作業モデルは愛着対象に子どもがとった行動あるいはとろうと意図した行動に対して愛着対象がどのように反応したかということの歴史の反映だとした。子どもは具体的経験を通してその出来事についての内的作業モデルを構築していく。よって，子どもが多く経験した出来事についての内的作業モデルは獲得が早くなり，まだ経験が少ない出来事に対しては内的作業モデルの獲得は遅くなると考えられる。このことより，移行対象の使用が分離再会場面を子に意識化させる契機となり，分離再会に関する愛着の内的作業モデルの獲得をより幼児期早期に実現させていると考えられた。

移行対象の使用が，安定した分離再会場面における愛着の内的作業モデルの獲得を促すことから，移行対象がほぼよい母子関係を前提としていることが裏付けられたと言えた。しかし，移行対象の使用は，乳幼児期早期の母子関係のすべてを反映しているのではなく，また，母子関係全般に影響を与えるものでもない。あくまで分離再会場面をより多く意識化する機会を与えるという，個別的経験の一つでしかない。移行対象の使用は，分離再会場面という限られた状況の中での安定した内的作業モデルを，比較的早期に獲得させ得るという特定の個人差を生むものとして位置付けられることが考えられた。今後はさらにこの位置付けを確認するために，すべての子に分離再会場面の内的作業モデルが獲得された時点での移行対象経験の有無と，その内的作業モデルの質との比較検討が求められる。

研究Ⅰにおいて，移行対象の使用を通して分離再会場面に関する安定した愛着の内的作業モデルが，早期に獲得され得ることが示された。分離再会場面に関する内的作業モデルが安定しているということは，実際の分離場面においてもその作業モデルが活用され，母子分離は不安が少なくスムーズに行われると考えられる。しかし先にも述べたように，移行対象を使用する子どもが気質的にストレスを感じやすいのであれば，実際の母子分離場面における子どもにとってのストレスは，非常に大きいと推察される。移行対象を使用した子どもは，安定した内的作業モデルを獲得したことによって，実際のストレスフルな場面に適応できているのであろうか。

研究Ⅱでは，子が獲得した内的作業モデルの質と，子にとって不安を喚起されやすい母子分離場面での実際の行動との関係を比較検討することとする。

研　究　Ⅱ

対　象

研究Ⅰにおいて移行対象の使用経験があった対象児15名のうち，幼稚園入園時にすでに移行対象が発現していた14名（男子9名，女子5名）。

手続き

対象児が幼稚園に入園した直後から4ヶ月間（4月～7月）の，登園時の母子分離の様子を分離場面として採用した。これは子どもが不安を喚起されやすい（愛着行動が喚起されやすい），子どもにとって新奇な場面を用いるためである。

分離場面は幼稚園の担任の先生への質問紙により測定した。質問紙においては入園後1ヶ月ごとの対象児の様子について①母親と離れることができず，母親が帰るとき泣く。②母親と離れるときに抵抗があるが泣くことは少ない。③先生がいると母親と別れることができる。④抵抗なく母親と別れることができる。の4段階で評定してもらった。また，この判定時には担任の先生が被験児について特に気になったことについて自由記述をもとめた。

結果と考察

4月から7月における母子分離状態から，不安の程度によってType1：分離不安が見られなかった（担任の先生に行った質問紙において4月から7月まですべて④の評価がなされた場合），Type2：4月においてのみ分離不安が見られた（4月は①，②，③であり，5月以降は④であった場合）Type3：7月の時点では分離不安が解消したがそこに至るまでにかなり強い分離不安を示した（4，5，6月は①，②，③の評価が見られるが7月には④と評価された場合），Type4：7月に分離不安が続いている（4月の評価が①で7月になっても①，②と評価された場合）の4タイプに分類した。その結果，Type1が5名，Type2が1名，Type3が5名，Type4が3名であった。これらのTypeについて，Type1，2を分離不安低群，Type3，4を分離不安高群とし，これとCATの図版7で得られた分離場面に関する愛着の内的作業モデルの質（母子関係安定群，その他群）との間で直接確率法を行った。その結果，分離場面

に関する愛着の内的作業モデルの質と実際の分離場面での行動との間には有意な関係が見られなかった（表5）。特にCATの図版7における叙述で分離場面に関する愛着の内的作業モデルが安定して獲得されていると判断された安定群の中に実際の母子分離場面での分離不安は高群と判断された子が多かった。つまり，安定した内的作業モデルを獲得しているにもかかわらず，実際の分離場面においては強い不安を示す場合もあるということである。

表5　移行対象の有無における図版7の母子関係と分離不安（人数）

	母子関係安定群	その他群	Total
分離不安高群	4	4	8
分離不安低群	5	1	6
Total	9	5	14

$p=0.36$,　n.s.

移行対象を使用することで分離再会場面を意識化する機会が相対的に多いと考えられる移行対象有群は，その意識化を通して比較的早期に安定した分離再会場面に関する内的作業モデルを獲得すると考えられた。しかし，実際の分離場面では分離不安を強く示す場合もあるといえた。安定した内的作業モデルが獲得されたにもかかわらず，その作業モデルは実際の行動には反映されないのであろうか。移行対象を使用する子どもの実際の分離場面における分離不安の強さを規定する要因をさらに検討するために，移行対象の発現時期ときょうだい構成について分離不安の強さとの比較検討を行った（表6）。

表6　分離不安の群別による移行対象の発現時期ときょうだい位置

被験児No.	移行対象発現時期（月齢）	発現時期群	きょうだい位置
分離不安　低群			
1	0	早	末子
2	12	早	最長子
3	20	遅	末子
4	24	遅	末子
5	14	早	末子
6	17	早	末子
分離不安　高群			
1	36	遅	最長子
2	30	遅	中間子
3	30	遅	末子
4	36	遅	最長子
5	10	早	最長子
6	12	早	最長子
7	6	早	最長子
8	36	遅	最長子

その結果，分離不安高群に分類された8名のうち5名が，移行対象が発現したのが生後30ヶ月以降という比較的遅い時期であった（平均24.5ヶ月）のに対して，分離不安低群では移行対象の発現時期が生後30ヶ月以降に現れた対象児はおらず，すべての対象児が2歳以前に移行対象を持ちはじめていた(平均14.5ヶ月)。しかし，移行対象の発現時期を生後18ヶ月（1歳6ヶ月）を境にして早群，遅群とした時に，分離不安高群の中での早群の対象児が3名，分離不安低群の中での遅群の対象児が2名あった。そこで，この5名についてそれぞれの対象児のきょうだい構成に注目したところ，分離不安高群の3名にはすべて本人の下に弟か妹がおり（つまり最長子または中間子），分離不安低群の2名はどちらも本人の年下にはきょうだいがいない（つまり末子）ということがいえた。自分の年下にきょうだいができるということは母親との関わりが，量・質ともに変化することを意味する。遠藤（1991）が言うように移行対象を持つ子がストレスを感じやすい気質をもともと持っているのだとすれば，そのような養育環境の変化をより敏感に感じ取るのではないだろうか。年下のきょうだいができることで分離に対する不安を強く感じやすくなると考えることができる。また，移行対象が遅い時期に現れたということは，相対的にストレスと感じるような環境の変化が比較的最近にあったということの現れと考えられ，これも分離不安を強く感じる要因の一つになっているのではないだろうか。これに対して移行対象を持つ時期が遅くても母親の養育を比較的十分に受けられる末子は，その安定した状況のため，分離に対して大きな不安を持つことがないと考えられる。こうして捉えると移行対象の有無が分離不安の強さを直接規定していることはないにしても，子の置かれる環境によっては，移行対象の使用は分離不安の大きさを左右する要因になりうると考えることもできる。

また同時に言えるのは，移行対象が子を慰める機能を持ち（Winnicott，1953），ある状況に適応する術としてはたらく（遠藤，1989）ことは確かかもしれないが，それがどんな状況にでも適用できる“適応の能力”の獲得とは異なるということである。移行対象を使用することによって子どもが置かれたある状況には適応できても，その状況が変わったとき（自分の年下にきょうだいができた，母親の関わりが相対的に減少した等）にも使えるような普遍的な力の獲得ではないのである。

本来安定した内的作業モデルが獲得できたのであれば，実際の場面においてのそのモデルを活用できると考えられる。しかし，内的作業モデルが普遍性をもって活用されるためには，4歳前後の表象能力獲得時期ではその安定性が不十分であるのかもしれない。この時期の内的作業モデルは，環境の変化によって実際の行動場面に活用できるかどうかが規定されてしまうのではないだろうか。特に移行対象を使用する子がストレスを感じやすい気質を持っているのであれば，移行対象を使用する子にとってはわずかなの環境の変化でさえも大きなストレスになりうる。よって，内的作業モデルを獲得できているとしても，環境の変化の影響を受けやすく，子の置かれた状況によって実際の行動場面における分離不安の強さが変化するのではないかと考えられた。

移行対象の使用という個別的経験は，分離－再会場面を多く意識化することによる，分離場面に関する安定した内的作業モデルの早期獲得を促す。しかし，その内的作業モデルはある安定した環境での分離場面への“適応”につながるものであり，この時期にはどのような環境にでもその作業モデルが普遍的に活用できるというわけではないのである。獲得された作業モデルが普遍性を持って活用されるようになるのはどのくらいの年齢になってからであるのか，ストレスを感じやすいとされる移行対象の使用が見られた子と，見られなかった子では作業モデルの獲得後の普遍性にも違いが見られるのかなど，今後の更なる検討が必要である。

総合的考察

移行対象使用の経験が安定した分離場面に関する愛着の内的作業モデルの早期獲得を促しているということが確認された。これは，移行対象を使用することが母親との分離－再会を多く意識化するこ

とと密接に関係していることに基づいていると考えられる。ただし，移行対象を持たなければ安定した分離場面に関する内的作業モデルを獲得できないということではなく，あくまで内的作業モデルの獲得時期を規定するという個人差に関わる要因の一つとして移行対象を捉えるものである。今後移行対象を経験しなかった子について縦断的に分離場面の内的作業モデルの獲得の様子を見ていくことで，移行対象が与える影響が個人差に過ぎないのかどうかが確認され得るだろう。

移行対象を持つことによる母親との分離－再会の意識化の増加から，遠藤（1989）らが述べてきた“適応の術”という移行対象の機能が裏付けられた。ただし，これはどんな状況にも対応できるような“能力”ではないことも同時に強調しておかなければならない。分離－再会の意識化を繰り返すことによって，子どもは自然に，そのとき自分が置かれた状況に適応していくに過ぎないのである。

しかし，移行対象を持つ子が遠藤（1991）が主張するように相対的にストレスを感じやすい気質を持っているとするのであれば，環境の変化にも敏感であると考えられる。よって，もともと分離時には不安を感じやすい気質であることも考えられ，その変化に伴って行動レベルでは強い分離不安を示すことが示された。同時に，表象レベルの愛着では環境や状況の変化には左右されにくいため，安定した内的作業モデルを示していたと考えられる（図1参照）。

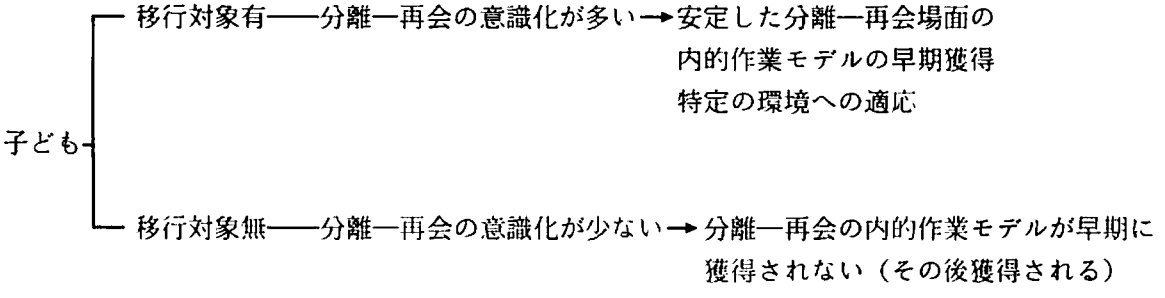

図1　本研究における移行対象の機能のモデル

移行対象の使用が子の愛着の発達の過程に個人差を生んでいることが推察される結果となった。同時に，移行対象が必要とされる背景として，子の気質という個人差が影響を与えているという遠藤（1991）の指摘が支持された。子が置かれたストレスフルな状況に適応する手段の一つとして，移行対象の使用が位置付けられたと言える。今後，移行対象の使用によって早期に獲得された愛着の内的作業モデルがどのように安定性を得ていくのか，移行対象を経験しなかった場合にどのように分離再会場面を経験し，内的作業モデルを獲得していくのかを検討することによって，移行対象の，子どもの発達における位置付けをさらに詳細に捉えることが課題となる。

引　用　文　献

Bowlby,J.　1982　黒田実郎・大羽蓁・吉田恒子（訳）母子関係の理論Ⅱ　分離不安　岩崎学術出版社.

Bowlby,J.　1981　作田勉（監訳）　ボウルビィ母子関係入門　星和書房

遠藤　利彦　1989　移行対象に関する理論的考察—特にその発現の機序をめぐって—　東京大学教育学部紀要,29,229－241.

遠藤　利彦　1990　移行対象の発生因的解明—移行対象と母性的関わり—　発達心理学研究,1,59－69.

遠藤　利彦　1991　移行対象と母子間ストレス　教育心理学研究,39,243－252.

Guntrip,H.　1981　小此木啓吾・柏木宏隆（訳）　対象関係論の展開　誠信書房

藤井　京子　1985　移行対象の使用に関する発達的研究　教育心理学研究,33, 106－114.

Hong,K.M.　1978　The transitional phenomena : A theoretical integration. The Psychoanalytic Study of the Child,33,47－79.

久保田　まり　1995　アタッチメントの研究—内的ワーキングモデルの形成と発達　川島書店.

戸川　行男　1955　幼児・児童絵画統覚検査解説CAT日本版　金子書房.

Winnicott,D.W.　1953　Transitional object and Transitional phenomena : A study of the first not-me possession. International Journal of Psycho-Analysis,34,89－97.

Winnicott,D.W.　1979　橋本雅夫（訳）遊ぶことと現実　岩崎学術出版

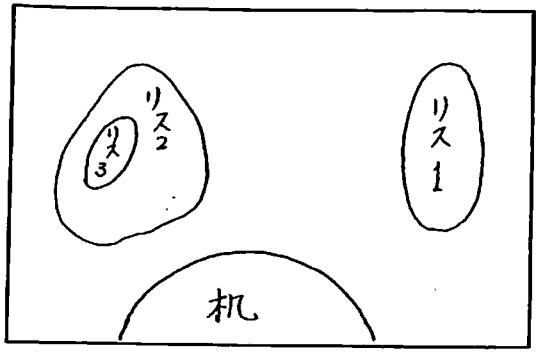

図4-1　CAT　図版3　(赤ちゃん)

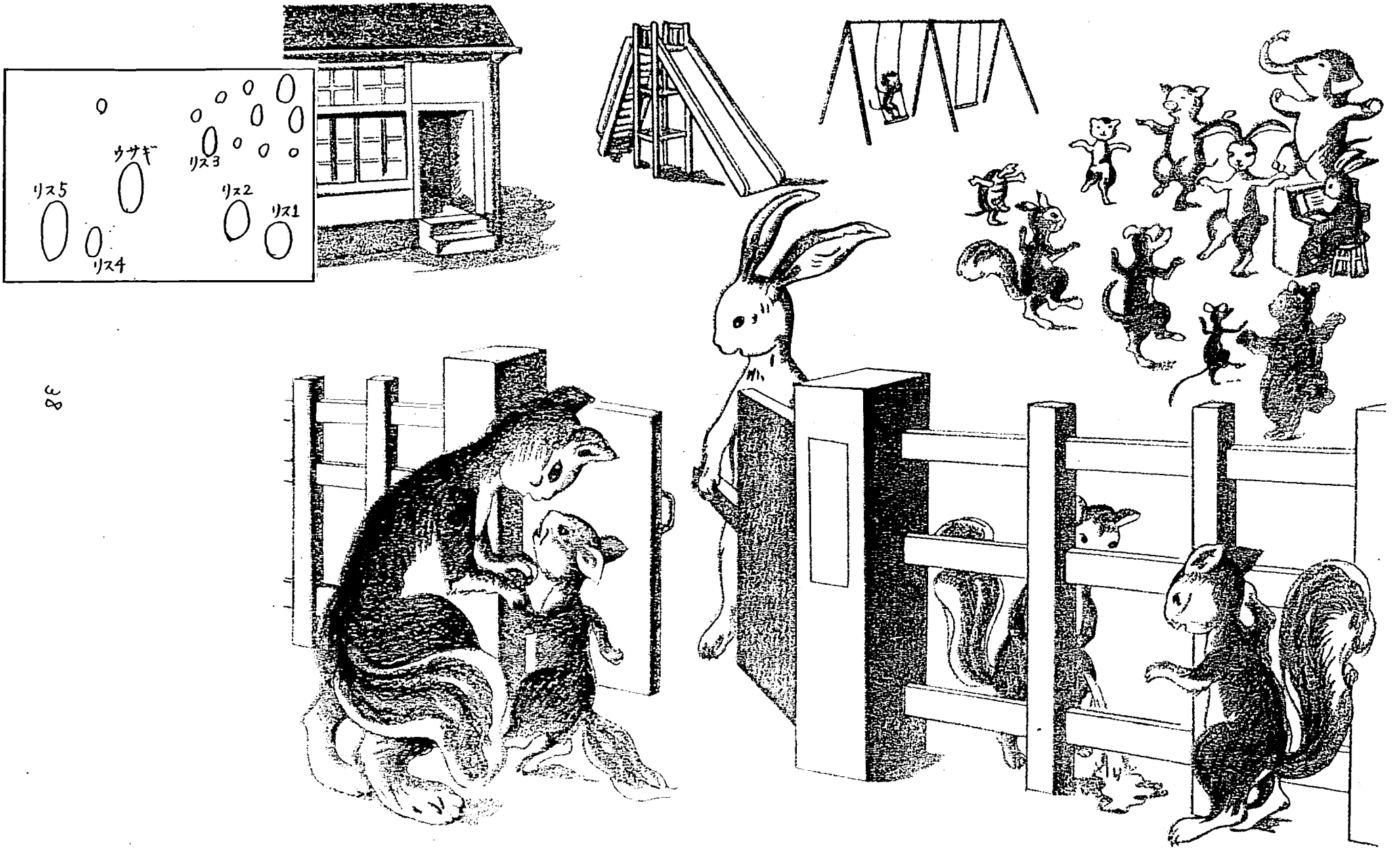

図4－2　CAT 図版7　(幼稚園)

表 4-1-2　　移行対象の種類と発現時期

No	移行対象の種類	タイプ	発現時期	発現理由
204	ぬいぐるみ	2	54－－	一人で眠るようになったため。
205	お気に入りのおもちゃ	2	36－－	
209	タオルケット	1	0－－	未熟児室で保育器に入っていたときに、下に敷いてあるタオルの、折り返した部分をずっと握っていた。それ以来続いている。
210	母親の服の袖口	1	17－－	
301	母親の服の袖口をかむ	1	30－－	双生児だったので、愛情が十分満たされなかったのでは。
302	母親の服の襟刳り	1	30－－	双生児だったため、愛情不足だったのでは。
306	ハンカチほどのプチタオル	1	12－－	一歳前に離乳してから始まったように感じる。
308	こどもちゃれんじのしまじろうマペット	2	36－－	次子が誕生してから一緒に寝たり出かけるときに連れていったり背中に背負ったりする。
309	お気に入りのミニカー	2	10－－18	兄の遊びを見ていて、つられて持ち始めたのでは。
313	耳掻き	2	12－－30	
321	毛布	1	6－－	どちらかというと寂しがりやなので、寂しさから持ち始めたのでは。
322	クマのぬいぐるみ	2	20－－32	一人で昼寝ができるようになったころから、親の代わりにぬいぐるみに添い寝させていたという感じ。
326	大切にしているぬいぐるみ	2	24－－	マンションで動物が飼えなくて変わりに買い与えた。自分がお世話してあげようという気持ちができたのでは。
328	お気に入りのおもちゃ	2	36－－	一人で寝るように勧めたため。
330	お気に入りのぬいぐるみ	2	14－－	自分の側においておきたいという気持ちからではないか。

表 4-1-3　性差と移行対象の有無（人）

	移行対象 無	移行対象 有	Total
男子	17	10	27
女子	16	5	21
Total	33	15	48

$\chi^2=.96$,　df=1,　n.s.

表 4-1-4　移行対象の有無ときょうだい順位（人）

	1--1	2--1	2--2	3--1	3--2	3--3	Total
移行対象 無	6	7	8	1	2	9	33
移行対象 有	1	5	5	1	2	1	15
Total	7	12	13	2	4	10	48

$\chi^2=4.94$,　df=5,　n.s.

表 4-2-1　図版３における母子関係のタイプと判定

タイプ	叙述内容	人数	判定
1.holding	リス３をチロ、リス２を母とした場合 「おっぱい飲んでるの」 「おかあさんがだっこして、チロちゃんは指ちゅっちゅしてるの」	8	母子関係安定群
2.肯定的関係	リス１をチロ、リス２を母とした場合 「おかあさんがちろちゃんにこっちおいでっていってる。」 「あかちゃんおっぱいのんでよかったねっておはなししてる」 「おかあさんとちろちゃんがいっしょにおやつたべてる」	17	
3.否定的関係	リス１をチロ、リス２を母としているが母親がチロに対して拒否的な場合 「おかあさんがあっちいってって言ってる」 「はやくべんきょうしなさいって言ってる」	2	その他群
4.かかわり欠如	リス１をチロ、リス２を母とするが、二人の関係が叙述されていない場合 「なにもしゃべってない」 「こうやって（手をのばして）いるだけ」 「おかあさん目つむってるだけ」	3	
5.母親不在	登場人物の中に母親が出てこない場合（主人公以外の人物が誰なのか答えられなかった場合を含む） 「これ（リス２）きいちゃん」 「チロちゃんとチロちゃんのあかちゃん」	7	
6.願望	自分に弟妹がいるにもかかわらず、リス３をチロとする場合 リス１をチロとするが叙述の中に赤ちゃんになりたいという願望が見られた場合	4	
7.わからない	チロを選択できない場合	7	

表 4-4-1　図版 3 における母子関係と移行対象の有無（人）

	移行対象 無	移行対象 有	Total
安定群	17	9	26
その他群	16	5	21
Total	33	14	47

$\chi^2=0.65$,　df=1,　n.s.

表 4-4-2　図版 7 における母子関係と移行対象の有無（人）

	移行対象 無	移行対象 有	Total
安定群	4	8	12
その他群	29	6	35
Total	33	14	47

$\chi^2=10.48$,　df=1　$p<.01$

表 4-4-3　分離不安のタイプと移行対象の有無（人）

	移行対象 無	移行対象 有	Total
1（分離不安　低）	13	5	18
2	11	1	12
3	8	5	13
4（分離不安　高）	1	3	4
Total	33	14	47

$\chi^2=6.81$,　df=3,　$p<.05$

Z＝1.11,　n.s.

表 4-4-4　分離不安のタイプと図版 3 における母子関係（人）

	安定群	その他群	Total
1（分離不安　低）	10	9	19
2	9	3	12
3	6	7	13
4（分離不安　高）	2	2	4
Total	27	21	48

$\chi^2=2.42$,　df=3,　n.s.

表 4-4-5　分離不安のタイプと図版 7 における母子関係（人）

	安定群	その他群	Total
1（分離不安　低）	6	13	19
2	3	9	12
3	2	11	13
4（分離不安　高）	2	2	4
Total	13	35	48

$\chi^2=2.19$,　df=3,　n.s.

ただし、図版３と図版７との連関を調べたところ、両者の連関の有意性が認められた（表５－２－１、$\phi=0.30$）。図版３と７では確かに表象する内容が異なってくるが、両者で現れる愛着の内的作業モデルはまったく別の次元の物ではないということが言えた。このことは子の愛着の質が様々な場面で一貫して現れてくるということを裏付ける結果である。今後、移行対象の愛着への関わりを更に調べていく上で考慮するべき問題である。

表5-2-6　図版３と図版７における判定（人）

		図版７		Total
		安定群	その他群	
図版３	安定群	10	15	25
	その他群	3	20	23
Total		13	35	48

$\phi=0.30$

〈図版７〉

門の前のリス（リス４、リス５）の母子関係を基準にしてタイプを分類し、母子関係を判定した。この結果が表４－２－２に示してある。被験児の叙述から図版の絵をどのような場面として捉えたか、母親と子リスの関係をどう捉えたかに着目して母子関係を１．肯定的分離・再会、２．会話、３．要求拒否、４．分離不安、５．母親不在、６．わからないの６タイプに分類した。判定では１．肯定的分離・再会、２．会話を「母子関係安定群」、３．要求拒否、４．分離不安、５．母親不在、６．わからないを「その他群」の２群に分類した。その結果、母子関係安定群が 13 人、その他群が 35 人であった。

表 4-2-2　図版７における母子関係のタイプと判定

タイプ	叙述内容	人数	判定
1.肯定的 分離・再会	母親に送られて元気に登園 母親といっしょに家に帰る 「みんなとあそんでおいでね」「うん」 「おうちにかえるとおにいちゃんがまってるよ」	10	母子関係安定群
2.会話	母親と楽しく会話している（分離・再会場面とは捉えていない） 「おやつのドーナツのおはなししてる」 「お熱が出たからおやすみしましょうかって言ってる」	3	
3.要求拒否	母親に要求を拒否される 「あそびたいよう」「だめ」 「だっこして」「だめ」	11	その他群
4.分離不安	幼稚園に行くのを嫌がる 母親が帰ってしまうのを嫌がる 「かえらないで」	5	
5.母親不在	母親（父親）でない人物とする 「おにいちゃんかな」	1	
6.わからない	リス５が誰かわからない 何をしているところかわからない	18	